
南山アーカイブズニュース

NANZAN Archives News

11号 2018年11月1日

目次

巻頭言

フォーリーニョの図書館……………オズワルド・カバラル……………2

南山発見

南山大学メールクワイヤーについて ―わが青春のバックヤード―……………小澤 善隆……………3

ベタニアの思い出……………山田 泰広……………4

私とアーカイブズ

アーカイブズと図書館：その相違点と共通点……………浅石 卓真……………6

「アーカイブズ講座」顛末……………永井 英治……………7



南山高等学校・中学校男子部校舎模型（南山アーカイブズ常設展示室）

巻頭言

フォーリーニョの図書館

オズワルド・カバラル

ずっと前からフォーリーニョ市（イタリア中部、ウンブリア州、人口6万人）の図書館に調べたい写本があった。交通のやや不便な場所で普通の学会や発表会の前後に簡単に行かれない。

フォーリーニョ市は歴史の長い町で、5世紀からウンブリア人の町として栄え、中世でも活発な都市国家であった。アッシジの聖フランシスコとの繋がりはとても深く、聖フランシスコは自分の持ち物、服と馬を売ってそこで新しい生活を始めた。フォーリーニョ市は2年前の地震で相当な被害が出て、今でもおもなモニュメントは外からしか見られず、博物館、図書館とアーカイブズも使用が難しい。しかしその写本を閲覧しなければ研究が進まないで、帰国休暇中見に行くことと決心した。図書館のホームページによれば開館時間は、月曜日から金曜日までの午後3時15分から6時15分まで。開館時間が短くて頭が痛くなってきた。フォーリーニョ市だけでは勿体無いから、ウンブリア州の首都であるペルージャ市の国立アーカイブズも利用することにした。

金曜日と土曜日ペルージャ市のアーカイブズを利用し、日曜日移動、月曜日フォーリーニョ市に着いた。午前中は町を歩き回った。モニュメントはほとんどが「修繕中立禁止」であった。午後3時頃、図書館に向かった。17世紀の3階建ての立派な建物で、前の広場は全部灰色の敷石、隣には古い教会が立っていた。地震後、同じ建物にフォーリーニョ教区のアーカイブズと資料館が設置された。3時15分になっても正門は開かない。また待つ。3時30分過ぎに、自動車が正門の前に駐車した。運転手（神父兼アーカイブズの館長）は車から降りずに、ドアを開けて3時45分まで午後の微風を楽しんでいたという。ようやく正門を開けようとしたので、近づいて挨拶と自己紹介をし、訪問の目的を説明した。彼は丁寧に「職員

がまだ来ていないが、閲覧室まで案内します。」と言った。職員の出勤を待ちながら、図書館の歴史、地震による被害、とフォーリーニョ教区の諸々の問題について話した。図書館は元々フォーリーニョ教区の神学院の図書館であった。17世紀に、ウンブリア史の研究者であったL. ヤコビツリ神父は神学院の図書館に5千冊の書物（写本とincunabulaを含めて）を寄付した。その後、遺言書により、再び3,800冊を寄付した。遺言書には、寄付のためには教区の神学院の図書館を公共施設にせねばならないという一つの条件があり、教区は寄付者の希望を叶えた。

4時過になって、係員と黒い犬が現れた。見たかった写本が渡されたがボロボロの状態で、ページをめくるのが不安だった。調べたかったテキスト（中世の法学者の助言）は見つかった。図書館の規則に従うと閲覧者は蔵書の写真を自分で撮ることはできず、某会社に依頼しなければならない。残された利用時間はギリギリ2時間で、テキストを書き写す時間はない。また頭が最も痛くなってきた。閲覧室の係員に自分の置かれた状況を詳しく説明すると意外な返事が帰ってきた。「それならば、どうぞ撮って下さい」安心して撮影をした。少し時間があつたのです、その写本をよく調べると、幾つかの興味深く、まだ知られていないドキュメントが出てきた。6時15分になって写本を返却し、係員に「どうもありがとうございます。この写本にはフランシスコ会の歴史に関する貴重なドキュメントがありますが、今回は時間がありません。もう6時15分です」と言った。すると、係員は「明日は、私は午前10時頃図書館に来ます。よろしければ開館します」とのこと。いろいろな話をしながら、7時過ぎに二人とも図書館から出た。祝うべき夜となったので、荘厳な夕食をして、ホテルに戻って宿泊を1日延長した。

（南山アーカイブズ館長／南山大学人文学部キリスト教学科教授）

南山大学メイルクワイヤーについて —わが青春のバックヤード—

小澤 善隆

私の在学期間は1969年～1972年。日本中の大学で、学生運動の立て看板やバリケード、角材やヘルメットなど、それまでのキャンパスには無縁なものが目立ちだした時期でした。東大安田講堂が封鎖され、それを排除する機動隊と抵抗する学生との攻防がニュース映像に流れ、学生世代にイデオロギー論争が広がった、騒々しい風潮の中でのキャンパス・ライフでした。

八事日赤病院前のバス停から国士無荘、南風荘（いずれも雀荘）を横目に急坂を上って正門をくぐり左折すると学食（今のR棟あたり）がありました。食堂はそれぞれのクラブのたまり場がほぼ決まっていて、出席を取るように顔をだし、講義以外の時間のスケジュールが決まるという穏やかな山里キャンパスにも、学生運動の波は伝播し、反帝学評なるセクトの諸君がG棟の入口にバリケードを作って封鎖する騒ぎが起きました。メイルクワイヤーはG-24教室が毎日の練習場所でしたが、OBが購入してくれたピアノが置いてあり、そのピアノがバリケードにされては大変だと、ヘルメット・タオル・角材装備でピケを張る学生に掛け合いに行きました。押し問答の末、ピアノを守ることはできたものの、騒動が鎮静するまでG棟教室は使えませんでした。

クラブ活動は体育系より文化系とくに音楽系に活気がありました。大学の合唱クラブが全国的に活発で、南山のメイルクワイヤーと女声コーラスは、ともに名古屋地区の大学合唱団をリードしているという自負がありました。卒業式・入学式の式典はオーケストラと共に進行される独特の雰囲気が南山大学の伝統として今も続いています。

メイルクワイヤーも部員数が100名に届く時代もあり、海外まで活動を広げること3度、また他校のグリークラブとの交歓演奏会も頻繁に開催されました。特

に姉妹校である上智大学のグリークラブとは、東京、名古屋で交互に催し、切磋琢磨する交流が続きましたが、その後クラブ活動の多様化の流れが部員数が減少し、第31回で上智大学グリークラブとの交歓演奏会も中断、メイルクワイヤーも休部そして廃部を余儀なくされました。

そんな流れの中でもかつての青春時代を呼び戻そうと、メイルクワイヤー創立65周年を記念して、盟友上智グリークラブとの交歓演奏会をこの地区で開催することが実現します。本年（2018年）8月12日、東海市芸術劇場大ホールにおいて、男ばかり老若とりあわせて100名を超える大合唱です。雀百まで踊り忘れず…の喩え通り、キャンパスで燃やした青春の血潮の一端をご披露しようと日夜練習に励んでおります。無論、温まる旧交を肴に杯を重ねることも忘れませんが……。

人生のある時期を同じ南山の学窓で共有したという偶然が、相互の時間に幅を持たせ、味わいを深くしてくれたことを思う時、わが青春に悔いなしと感じさせられるのは、人生終盤に差し掛かった感傷なのでしょう。

ありがとう、アルマ・マーテル NANZAN！

（南山大学メイルクワイヤーOB会長）



創立60周年記念演奏会(2013年8月)

ベタニアの思い出

山田 泰広

南山短期大学（以下短大）が創設されたのが1968年。それから50年を経た2018年3月19日、南山大学キャンパス内にあるカフェLienの一角で、短大部現職員のほか旧職員や大学役職者などが出席して南山短期大学・南山大学短期大学部50年閉学部記念感謝ミサが厳かに行われた。主司式司祭を務めたのは南山学園理事長・南山大学短期大学部教授の市瀬英昭神父であった。このミサは短大・短期大学部における50年の教育の実りを神に感謝し共に祝うものであったが、同時に、前年度に学生募集を停止して、最後の学年となった学部生の卒業を数日後に迎えようとしている短大部の幕引きを飾るものでもあった。私事であるが、私は1979年4月から今日まで南山学園に在籍し、来年3月に退職するので、短大・短大部における教育活動の歴史の5分の4に関わったことになる。その歴史を顧みて何かを書くようにとの依頼であるが、かつて短大に関わった人ならおそらく誰もその名を聞いて懐かしく思い出す場所のことを書いておきたい。短大が短大部に改組されてキャンパスが枳中から山里町へ移転するまでの長い間、学生、教員、事務職員、卒業生等の交流の場であったベタニアのことを。

『南山短期大学15年史』によれば、1979年11月28日、それまで校舎内地下にあったチャペルセンターは、道路一つ隔てた日本家屋の短大研究所に移転、学長により「ベタニア」と命名された、とある。つまり、宗教活動を核とした研究所の名前がベタニアであった。キリスト教精神の生かされた、共同体の場を学内に作りたいという第二代学長アルベルト・ポルト学長の希望は1976年のチャペルセンター創設によって実現されたが、「場が地下であること、宗教活動のために独立した場でないこと、合宿設備が不十分であること等々」の問題があった。それらの問題を解消するため、第三代学長ヨハネス・シュ

ーベルト神父が赴任して間もない1979年6月5日『南山短期大学三十年史』では10月31日となっている一道路一つ隔てた所にあった日本家屋を取得して一部を改造し、チャペルセンターの機能をそちらへ移したのである。南山大学にあるロゴスセンターに倣った施設であった。その名は、エルサレム近郊の村に由来している。イエス・キリストが宣教の合間に訪れて、親しい友人たち（ラザロ、マルタ、マリア）の家で、憩い、食事をし、話し合う時を持って親睦を深めた村の名である。静かに祈り、黙想をし、賛美を歌う集まりの場でもあった。そのような場になるようにとの思いを込めて、新しいチャペルセンターは「ベタニア」と命名されたのである。

こうして私が着任して間もなく誕生したベタニアと私との付き合いは2011年4月に改組で私たち短大部教員の勤務地が南山大学名古屋キャンパスに変わるまで32年続いた。しかし、キャンパス移転後私はベタニアを訪れることはなかった。建物は撤去され、跡地は整地されて駐車場になったと聞いたので、わざわざ足を運ぶことはなかった。それでも、今回ベタニアのことを書こうと決めた時、やはり今の姿を見ておこうと思い立って出かけてみた。実際、そこは人づてに聞いたとおり殺風景な駐車場であったが、遠い記憶を呼び覚まそうとしばしその場に佇んだ。以下はその時頭に浮かんできた、とりとめのない些細な記憶の断片である。

今はもうないその日本家屋は、道路に沿って黒い板塀のある、瓦屋根の大きな平屋であった。正面入り口は屋根付きの門構えで、写真を見ると「南山短期大学研究室ベタニア」と印字された紙が貼られている。この門は午後5時になると閉じられたが、脇にくぐり戸があって、以降はそこから出入りができた。この古風で立派な門構えの屋敷の表札として「研究室」の張り紙がしてあるの

がなんとも可笑しい。

今回ベタニアの跡地を訪れた時、大きな2本の樹が残っていることに気づいた。表の道路脇に大きな樟が聳えていた。こんな大きな樹があったかしらと思うほどの大きさだった。もう1本は奥の方にあり、中へは入れなかったのが道路から眺めるほかなかったのだが、おそらく柿の木だと思う。実はこの樹には個人的な思い出がある。建物があった頃は、その樹の周辺はオープン・スペースになっていて、その一角にはバーベキュー用の炉が設置されていた。このスペースは私たち職員がバーベキュー・パーティー（「アサード」の会）などの親睦会に利用するのに格好の場所であった。そんな機会に一度私は酔いが回っていい気分になり、その柿の木に登ったことを覚えている。私が登っても折れないほど太い幹であった。その樹に違いない。

ところで、懐かしいとは言っても私自身はそんなに頻繁にベタニアを利用したわけではない。定期的に利用したのは年に2,3回であった。1回は上述したような職員の食事会での利用で、柿の木のあるオープン・スペースと屋内の二間続きの広い和室が使われた。もう1回は、1985年から毎年新入生を対象に実施された英語科のクラス合宿での利用で、1年生の指導生と上述の広い和室で食事を共にし、後片付けをした後は話をしたり、ゲームをしたりして夕べのひと時を過ごすのが英語科教員の恒例行事であった。これら以外では、毎年南短祭の時と卒業前に茶道部が開催した茶会の時に招待されてベタニアに足を運ぶ機会があった。ベタニア内には茶室と床の

間のある本格的和室があったので、茶道部の活動はベタニアで行われていた。恒例の茶会に招待されて何度かベタニアの茶室、和室へ足を運んだことを覚えている。

そのような長年にわたる定期的利用とは別に、一時期研究会への参加のために訪れていたこともある。ベタニアが誕生して間もない頃であったと思うが、人間関係科の大庭征露教授の呼びかけでアウグスティヌスの『告白』を英文テキストで読む会が二間続きの和室で開催された。これには、英語科と人間関係科の教員が何人か参加していたが、詳しいことは覚えていない。ただそこでの議論に知的興奮を感じたことは覚えている。

私とベタニアとの付き合いはおよそそのようなものであった。ベタニアをもっと頻繁に利用した方々、ベタニアの運営にもっと深く関わった方々から見れば、私の付き合いは浅いものでしかないだろう。確かに1年当りの利用頻度は低かった。それでも付き合いの期間は誕生から閉鎖までと長く、今も忘れ難い場所として記憶の中に生き続けている。ベタニアを利用した人の数だけベタニアの思い出がある。利用頻度も利用目的もみんなが同じではない。そうではあっても、短大に関わった人は、おそらく誰もがあの古い日本家屋、畳の上になると沈んで床が抜けそうな、あのレトロな家を懐かしく思うに違いない。私もその一人である。『15年史』によれば、ベタニアの前身であるチャペルセンターを誕生させたボルト神父はその開所式で「この場が南短生の心のふるさとなるように」と述べたとあるが、ベタニアは、無くなった今も、遠いふるさとのように懐かしい場として私たち

の心で生き続けており、これからも生き続けることだろう。

（追記）

ベタニアの名は改組後には短大部の学生による学生支援組織の名として2017年度まで残った。

（南山大学短期大学部英語科教授）



ベタニア 2010年10月5日撮影
David Kluge 南山大学外国語教育センター教授

アーカイブズと図書館：その相違点と共通点

浅石 卓真

筆者はアーカイブズ学の近接領域である図書館情報学を専門としているが、この2つの領域は教育・研究・実践の全ての面で関わっている。例えばアーカイブズ学を専門とする教員が司書課程の一部を担当する大学は珍しくないし、アーカイブズ学専攻の大学院には図書館情報学の科目が設置されている。また図書館 (library)・文書館 (archives)・博物館 (museum) の連携はそれぞれの頭文字をとって MLA 連携と呼ばれる。

図書館とアーカイブズ (文書館) そして博物館は、いずれも何らかの資料を収集・保存・公開する施設であり、元々は厳密に分離していたわけではない。古代のアレクサンドリア図書館はパピルスに記録された資料を保存する図書館であったが、同時にミュージアムの語源であるムセイオン (現在の大学や研究所に相当する) の付属施設とされていた。大英博物館も名称こそ博物館であったが、1973年まで内部に図書館を含んでいた。

現在のアーカイブズと図書館を比較すると、その違いは第一に収集する資料に見られる。図書館は印刷・製本により大量に複製された出版物を主に扱っており、それらの多くは書店などでも入手可能である。これに対してアーカイブズは歴史的な資料や組織の内部文書など、出版市場に出回らない資料を主に扱っている (これらは図書館では灰色文献と呼ばれる)。

第二に、資料を整理する方法にも違いがある。図書館では同じ資料ならどの図書館でも同じようにアクセスできるよう、個々の資料を統一的な分類体系の中に位置付ける。これに対してアーカイブズでは、資料の作成された文脈 (作成者や部局、時代) をできる限り維持しようとする。極端に言えば、同じ資料でもどのように位置付けるかによって、管理のされ方が異なる。

第三に、資料提供における違いである。図書館の資料の

多くは開架書架に置かれており、貴重書や参考図書を除けば一定の手続きを経て誰でも「貸出」ができる。これに対してアーカイブズの資料は、その殆どが開架書庫に置かれており、研究目的に応じて「閲覧」が認められたり、ガラスケースに入れられ「展示」されたりするが、一般に貸出は認められない。

このように、アーカイブズとは出版市場に出回らない内部文書等を収集し、原秩序を維持する形で保存・展示する設備であるが、特に大学や企業のアーカイブズはそれにより組織のアイデンティティを体現する機能を持つ。また公的な文書を扱う公文書館は、資料の選別段階で国の歴史をどのように作るかにも関わる。

アーカイブズと図書館は収集する資料、整理・提供方法に違いがあるが、一方で共通の社会的使命を持っている。ローレンス・レッシング著『Free Culture : いかにかに巨大メディアが法をつかって創造性や文化をコントロールするか』 (山形浩生・森岡桜 訳, 翔泳社, 2004, p.138) に次のような文章がある。

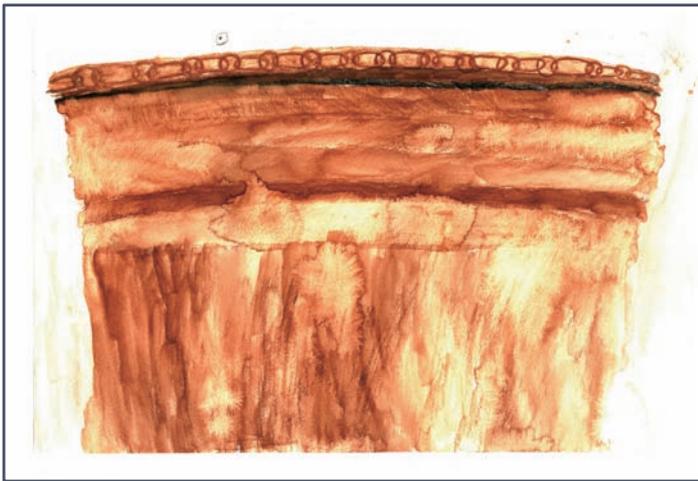
「歴史を忘れるものはそれを繰り返す運命にある、と言われる。でもこれはあまり正しくない。我々はみんな歴史を忘れる。大事なのは、忘れたものを戻って再発見する手段があるかということだ。・・・図書館は、コンテンツを集めて・・・保管することでその助けをしてくれる」

「忘れたものを再発見する手段を提供する」という機能は、図書館だけでなくアーカイブズにも求められる。最近の日本での公文書を巡る問題は、このような社会的記憶装置の必要性を端的に示しているが、歴史的に日本はこの機能を軽視してきたと言わざるを得ない。今後の文化行政のあり方が注目される。

(南山大学人文学部人類文化学科准教授)

「アーカイブズ講座」 顛末

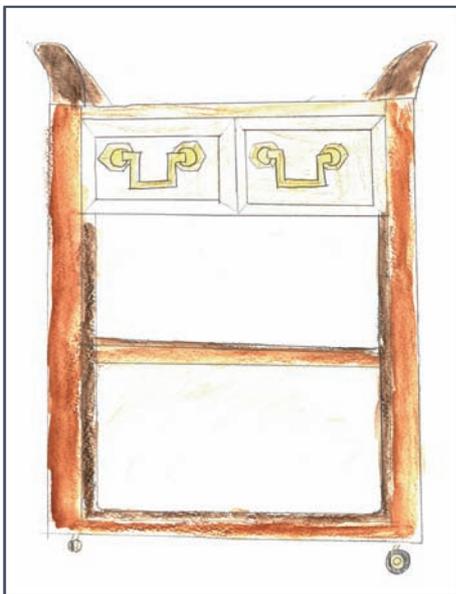
永井 英治



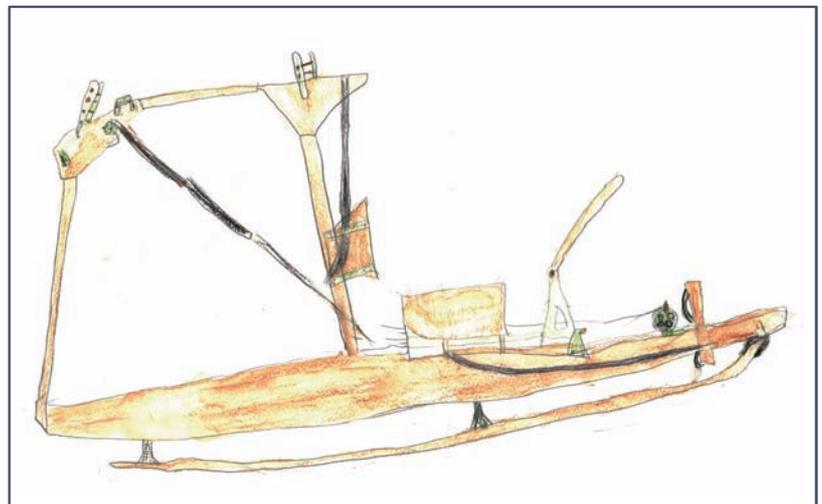
南山大学附属小学校 4 年生



南山大学附属小学校 3 年生



南山大学附属小学校 3 年生



南山大学附属小学校 3 年生

私が南山大学で担当している「アーカイブズ学入門」と題する授業の初回に、「アーカイブズという言葉を知っている人？」と訊ねると、10年前は少なからず手を挙げる受講生がいたが、近年、その数が少なくなった。理由の一端は、「NHK アーカイブ」という番組に関する記

憶の有無にあるらしい。その真偽はともかく、アーカイブズの知名度が大学生でも減っているというのは、少なからず危機感を覚えるべき事態である。

しかし、アーカイブズの広報活動をもっと積極的に展開しなければいけないと意気込んでも、そうそう出来る

ものではない。それなら、小学生くらいのうちから、archival literacyについて学習する機会を設けておけば、彼・彼女らが成長する頃には、事態は改善に向かうかもしれない。そう考えて企画したのが、2018年度から始まった「アーカイブズ講座」である。では具体的にどんな内容にするか、南山アーカイブズのスタッフの中で議論した。

紆余曲折を経て決定したのが「文化財保護」の重要性についてポスターを作ろう!」である。参加者には、南山アーカイブズの資料のスケッチを描いてもらうことにして、夏休みの始めに実施すれば学校の宿題にも転用できるかもしれない、参加者も多く見込めると目論んだ。議論していたのはまだ冬だったので、南山アーカイブズが設置されているライネルス館そのもののスケッチもありと気楽に考えていたら、今年の猛暑である。炎天下でのスケッ

チは熱中症の危険もあるということで、館内限定となった。

実施したのは2018年7月25日(水)午後1時~3時、南山大学附属小学校3・4年生から4名が参加してくれた。小学生は猛暑でも少人数でも元気の塊で、期待していた人数になったら、とてもスタッフの手に負えなかっただろう。文書資料が関心を集めなかったのは、アーカイブズとしては残念であるが、やはり描きたいものを描いてもらうのが一番である。ということで、出来上がった作品が冒頭の4枚のスケッチです。次回は、「塗り絵」で企画できないかなど、思案中です。企画が実現したら、今度は参加してみようかなと思う小学生の皆さんを待っています。

(南山アーカイブズ/南山大学国際教養学部国際教養学科教授)

展示室のご案内

南山学園の歩みを概観していただける常設展示室と南山学園の歴史について様々な視点からの展示を行う企画展示室があります。

～～現在開催中の企画展～～

テーマ: 南山大学の設置～名古屋外国語専門学校から南山大学へ

開催期間: 2018年10月1日～2019年7月31日

開館時間: 月～金(土・日・祝・事務休業日を除く)

10:00～16:00

入場無料、予約不要でどなたでもご見学いただけます。展示クイズ・スタンプラリーコーナーもあります。参加者には記念品の配付も行っておりますので是非参加ください。皆様のご来館をお待ちしております。

史資料寄贈のお願い

当館では、南山学園に関する以下のような史資料を広く収集しています。

- モノ: 校章・バッジ・体操服・制服など。
- 文書: 教科書・教材・時間割など。
- 写真: 授業・学生生活・サークル活動など。

在学・在職時にはありふれていたものが、学園史を知るための貴重な史資料となることは少なくありません。まずは南山アーカイブズまでお問い合わせください。

< 連絡先 >

TEL052-861-0613/FAX-052-861-0614

E-mail: nanzan-archives@nanzan.ac.jp